

無教会研修所キリスト教講演会

2024年11月23日

今井館聖書講堂

塚本虎二の無教会伝道

——近代宗教文化史のフロンティア——

赤江 達也

本日、お話しすること

- 1 塚本虎二を語りなおす
- 2 無教会「第二世代」の時代 1930-50年代
- 3 教養主義世代の求道 1900-20年代
- 4 無教会伝道の開拓者 「教会の外に救あり」
- 5 新約聖書翻訳【開拓地①】
- 6 女性信徒との協働【開拓地②】
- 7 皇室教育【開拓地③】
- 8 20世紀宗教文化史のミッシング・リンク

1 塚本虎二を語りなおす



内村鑑三記念講演会 大阪中央電気倶楽部にて 1933年4月3日

(前列左から) 金澤常雄、塚本虎二、畔上賢造、黒崎幸吉

(無教会史研究会編 1993)

(後列中央) 矢内原忠雄、[その右] 三谷隆正

塚本虎二(1885-1973)

- ①無教会キリスト教の伝道者
内村鑑三(1861-1930)没後、
1930-50年代に無教会の内外で
大きな存在感を持っていた独立伝道者
- ②新約聖書研究者・翻訳者
新約聖書「口語訳」の先駆者
岩波文庫版『福音書』(1963)
教養主義のバイブル 70刷
- ◎新約聖書翻訳が読まれているが、
無教会キリスト教の研究においても
論じられることの少ない人物



塚本虎二をめぐる議論と忘却

無教会運動内で否定的に語られてきた、いくつかの論点

- ・「無教会主義」の語り方をめぐる内村との衝突(1928)
- ・「独立」をめぐる内村との葛藤、結婚問題(1929)
- ・「戦争」をめぐる発言(戦時期)
- ・「キリストの幕屋」との関係(戦後初期)

藤田若雄編『内村鑑三を継承した人々(上・下)』(1977)

- ・無教会の「戦争責任」論をめぐる重要な共同研究の成果
- ・塚本の信仰や人格(「母性宗教」、女性的な性格)を否定的に評価
- ・塚本の問題として、以下の点が挙げられている
 - ・「教養主義」的な信徒からの支持
 - ・「女性」「婦人」からの支持
 - ・「多数派形成」(聴衆や読者の多さ、経済的安定)

⇒こうした批判の修正から、塚本虎二を「語りなおす」試み

なぜ塚本虎二は忘れられてきたのか？

無教会「第二世代」(1920-50年代)

- ・「無教会主義」=「日本的キリスト教」
- ・天皇=皇室の尊重と期待

無教会「第三世代」(1960-70年代以降)

- ・「日本的キリスト教」に対する批判的な距離——「市民的キリスト教」
- ・藤田若雄らの批判・告発(大河原礼三「無教会は右翼だ」)
- ・第二世代の天皇観やナショナリズム思想の批判的検討

無教会「第三世代」による無教会史の研究=反省

- ・矢内原忠雄らの天皇観の問題は、鋭く指摘されるが、検討は不十分
- ・第二世代と第三世代の「無教会主義」理解の変化
- ・塚本虎二のスケープゴート化

無教会運動の世代間変容⇒塚本虎二の過小評価

『内村鑑三を継承する人々』を書きなおす

塚本虎二集会の「教養主義」的傾向への批判

⇒「教養主義」を基盤として拡大する無教会運動
信仰の実践として聖書を勉強する信徒たちの運動

塚本虎二と「女性」をめぐる批判

⇒女性信徒たちにも聖書・語学教育を行い、
女性の聖書翻訳者を育成・協働した塚本虎二

塚本虎二の「天皇」観への批判

⇒無教会「第二世代」による「皇室教育」
そのキーパーソンとしての塚本虎二

2 無教会「第二世代」の時代 1930-50年代

内村鑑三から、無教会「第二世代」へ

無教会キリスト教

内村鑑三(1861-1930)にはじまる宗教思想運動

1900年(明治33)、既存の教団から距離をとり、伝道を開始
個人雑誌と聖書講義(聖書研究会)を主軸とする伝道スタイル

- ・『聖書之研究』(1900-1930)
- ・聖書講義(聖書研究会)、内村門下の諸集会、国内外各地の読者集会

1930年(昭和5)、内村鑑三死去

無教会「第二世代」の伝道者たちが牽引する無教会運動に

無教会運動の最盛期は1950年代(=「第二世代」の時代)

- ・無教会雑誌は1937年に約30誌、1960年頃に約60誌
- ・無教会信徒は1950年代に3-5万人(キリスト年鑑の推定値)

『聖書之研究』第一号表紙(1900年9月)



『無教会』第一号表紙(1901年3月)



「紙上の教会」

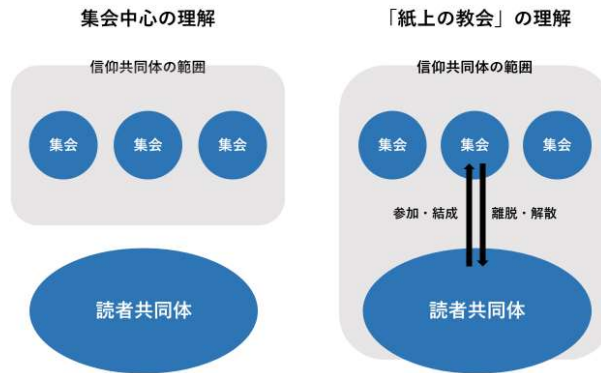
内村鑑三「社説『無教会』雑誌『無教会』第7号(1901)

本誌は元々教友の交通機関を目的として発行した者でありまして、一名之を『紙上の教会』と称へても宜しい者であります、即ち私共行くべき教会を有たざる者が天下の同志と相互に親愛の情を交換せんために発行された雑誌であります[。]

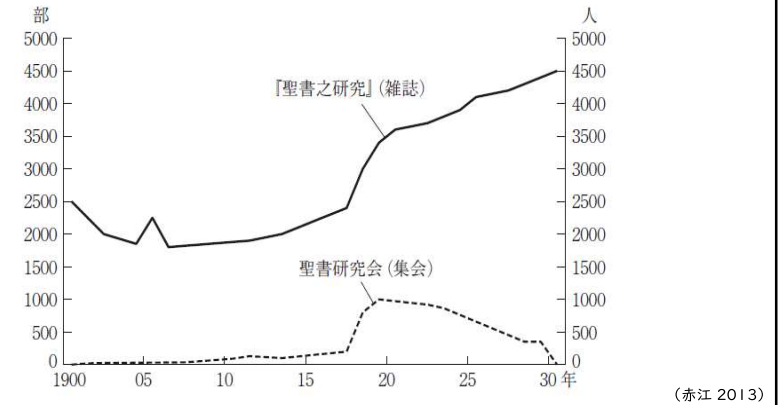
内村鑑三「雑記」『聖書之研究』(1905年)

我等は勿論外形的団体に重きを置かず、我等の靈的生命は深きこと北氷洋より流れ来る氷山の如し、其八分以上は水平線下に在り、然れども残余の二分また全く軽視すべきに非ず、すでに水平線下に於て永久の友たるもの、亦水平線上に於て一団の形を為すも妨げなかるべし[。]

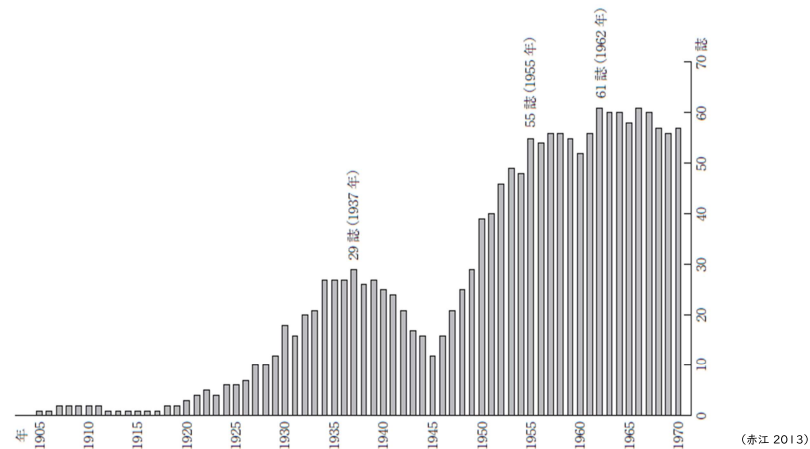
集会群を生成する読者共同体



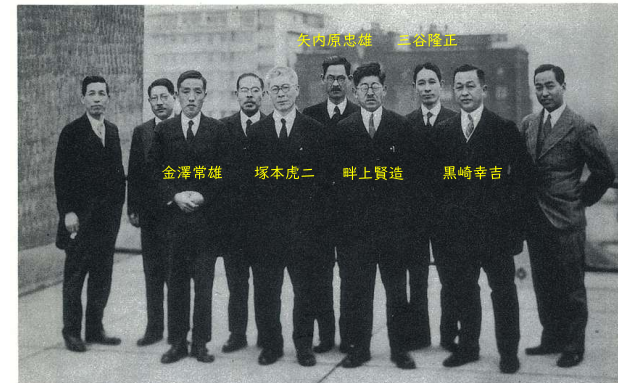
内村鑑三の雑誌部数、聴衆数の推移(1900-30)



無教会雑誌数の推移(当該年内に刊行された雑誌数 1905-1970年)



無教会第二世代による継承・展開 1920-30年代



内村鑑三記念講演会 大阪中央電気倶楽部にて 1933年4月3日
 (前列左から) 金澤常雄, 塚本虎二, 畔上賢造, 黒崎幸吉
 (後列中央) 矢内原忠雄, [その右] 三谷隆正

藤井武(1930年病没)を加えた七人が、第一回の内村記念講演会(1930)の登壇者。矢内原忠雄が「われら七人」と呼んだ同志。

(無教会史研究会編 1993)

無教会伝道者の「世代」区分

第二世代

- ・内村の直弟子
- ・1880-90年代前半生まれ
- ・1900年代に入門

第二・五世代

- ・内村の直弟子(年下グループ)
- ・1890年代後半以降生まれ
- ・1910年代以降に入門

第三世代

- ・塚本や矢内原に師事
- ・1910年代以降生まれ
- ・1930年代以降に入門

		生年		没年		信仰上の師
	内村鑑三	1861	万延2	1930	昭和5	
第二世代	畔上賢造	1884	明治17	1938	昭和13	内村
	塚本虎二	1885	明治18	1973	昭和48	内村
	黒崎幸吉	1886	明治19	1970	昭和45	内村
	藤井 武	1888	明治21	1930	昭和5	内村
	南原 繁	1889	明治22	1974	昭和49	内村
	三谷隆正	1889	明治22	1944	昭和19	内村
	江原萬里	1890	明治23	1933	昭和8	内村
	金澤常雄	1892	明治25	1958	昭和33	内村
	矢内原忠雄	1893	明治26	1961	昭和36	内村
第二・五世代	石原兵永	1895	明治28	1984	昭和59	内村
	伊藤祐之	1896	明治29	1969	昭和44	内村
	鈴木彌美	1899	明治32	1990	平成2	内村
	山本泰次郎	1900	明治33	1979	昭和54	内村
	政池 仁	1900	明治33	1985	昭和60	内村
	鈴木俊郎	1901	明治34	1982	昭和57	内村
	藤澤武義	1904	明治37	1986	昭和61	内村
	大塚久雄	1907	明治40	1996	平成8	内村
	関根正雄	1912	大正元	2000	平成12	内村・塚本
第三世代	藤田若雄	1912	大正元	1977	昭和52	矢内原
	前田護郎	1915	大正4	1980	昭和55	塚本
	中沢治樹	1915	大正4	1997	平成9	塚本
	西村秀夫	1918	大正7	2005	平成17	矢内原
	高橋三郎	1920	大正9	2010	平成22	矢内原
	富田和久	1920	大正9	1991	平成3	矢内原

おもな無教会伝道者・知識人生没年表



(赤江 2024)

近代日本キリスト教の「第二世代」

幕末生まれ:日本人プロテスタント思想家の第一世代

- ・海老名弾正(1856-1937) 日本組合基督教会牧師
- ・植村正久(1858-1925) 日本基督教会牧師
- ・内村鑑三(1861-1930) 著述家・独立伝道者

明治18年(1885)頃以降:プロテスタント思想家の第二世代

- ・塚本虎二(1885-1973) 無教会伝道者、新約聖書研究者・翻訳者(内村に師事)
- ・高倉徳太郎(1885-1934) 日本基督教会牧師 東京神学社校長(植村に師事)

明治22年(1889)頃以降:カトリック思想家の第一世代

- ・岩下壮一(1889-1940) カトリック司祭・哲学者 最初期の日本人カトリック思想家
- ・田中耕太郎(1890-1974) 法学者・法哲学者・裁判官(内村門下からカトリックへ)

3 教養主義世代の求道 1900-20年代

1901年、「主義」の時代

世紀転換期の宗教思想運動

新仏教運動 『新仏教』(1899)
 海老名弾正 『新人』(1900) 『新女界』(1909)
 清沢満之 浩々洞(1900.9) 『精神界』(1901.1) 精神主義(1901.1)
 内村鑑三 『聖書之研究』(1900.9) 無教会主義(1901.5)
 田中智学 日蓮主義(1901.9)
 植村正久×海老名弾正 キリスト論論争(福音主義論争)(1901.9-)
 新仏教同志会とユニテリアン協会の交流(1901)
 近角常観 求道学舎(1902.3) 『求道』(1904.2) 求道会館(1915)
 網島梁川 見神の実験(1904) 「余が見神の実験」『新人』(1905)
 西田天香 新生活の開始(1904) 一燈園

- 1901年、「主義」の流行 (赤江2021a『近代日本宗教史2』春秋社)
- 制度的宗教性(教団的宗教性)からはみ出る拡散的宗教性(求道の宗教性)
- 教団形成=制度的定着(森岡清美) / 拡散的定着(赤江2021a)

宗教思想を求める「教養主義」青年たち

塚本虎二の求道

- 1885(明治18)年、福岡生まれ。修猷館中学卒業後、
- 1904年、一高入学。基督教青年会(石川角次郎)、仏教青年会(近角常観)
- 1906-07年、一高三年、内村鑑三に私淑。1907年、読書を通じた「神秘体験」
- 1909(明治42)年11月、内村の聖書研究会に出席しはじめる。「柏会」に参加

「教養主義」の成立と、無教会「第二世代」

- 一高生の藤村操(1886-1903)が華厳滝で投身自殺(遺書「巖頭之感」)
- 「煩悶」青年:高等教育制度を通過したエリート青年たちの不安と求道
- 日露戦争後(1900年代後半)における「教養主義」の成立
- その主要な舞台が新渡戸稲造校長時代の第一高等学校
- 内村鑑三門下における「柏会」「白雨会」の形成(=無教会「第二世代」の人びと)

塚本虎二の「神秘体験」

一高三年(二十三歳^[数え年])の[1907年]二月十日に、始めてキリストがわかった。夕方隣の東大——当時一高は本郷にあった——の池の端で、私は聖書を読みながら軽い眠に落ちた。目が覚めると、深い霧が裂けて、神とキリストと私が一道の光でつながれるのを感じた。その瞬間、私にキリストが神の子であるとの信仰が生まれた。池に下りて、私は自分で自分に洗礼した。その後私は教会で再び洗礼を受けない。急いで寮に帰って聖書を読むと、今までと違ってすらすらと読め出した。感激の日が続いた。心が燃えて、道行く人を皆抱きしめたような気がした。(『去思と望憶』435-436頁)

読書を通じた「神秘体験」⇒内村の聖書研究会に参加

国家官僚から聖書研究者へ

- 1911(明治44)年、東京帝国大学卒業後、農商務省に入省
- 官吏をしながら、聖書の研究のためギリシャ語・ヘブライ語等を学ぶ
- 内村鑑三らによる再臨運動(1918-1919)を契機として、
- 1919(大正8)年に農商務省を辞し、聖書研究者(独立研究者)に

実生活の不安から霊に目醒むる新日本／米問題に努力した塚本参事官を初め高等官が続々辞職し伝道師に／「角笈の聖者」内村鑑三氏を慕うて四方より集ひ来る青年求道者 (『東京朝日新聞』1919年5月30日、インタビュー記事見出し)

- 1921(大正10)年の結婚を契機として、植村正久と交流
- 富士見町教会の信者たち(ペテル会)に、聖書講義を行う
- 植村正久校長から東京神学社の講師の声がかかるが、塚本は固辞

1920年代初頭における塚本虎二の位置:

- 内村鑑三(無教会)と植村正久(日本基督教会)の「間」
- 近代日本キリスト教の「第二世代」、その中心人物

内村鑑三の「助手」時代 1923-29年

独立研究者から、内村の「助手」となる

- 1923(大正12)年、関東大震災で妻を失う
- ドイツ留学を取りやめ、同年11月から内村鑑三の助手に
- 内村とともに講壇に立つ(畔上賢造は雑誌編集担当の助手)
- 1925年、「ギリシヤ語聖書研究会」の開始

「無教会主義者」の自覚

- 1925(大正14)年、植村正久の死と前後して、
- ある神学生の発言をきく(日本的キリスト教なるものは存在しない)
- 内村鑑三は1920年以降、「日本的キリスト教」を語っていた
- この時期以降、塚本は「無教会主義者」の自覚を持つ

内村より過激な「無教会主義」の唱道

- 1920年代半ば、内村門下の田中耕太郎や吉満義彦がカトリックとなる
- 1928(昭和3)年、『聖書之研究』で「教会主義」批判を毎号掲載(分載)
- 同年、カトリック思想家・岩下壮一との論争
- 同年9月、塚本の「無教会主義」論に対し、内村が修正を要求

内村:①教会と無教会は二者択一ではない

②無教会主義は「第二問題」に過ぎない

③信仰において教会と無教会は一致しうる

- 塚本は改稿を受け入れるが、塚本は必ずしも納得していない

➤内村:プロテスタンティズムの「徹底」(「教会」への批判と協力)

➤塚本:カトリックを典型とする「教会主義」批判(→標語「教会の外に救あり」)

⇒無教会第二世代は、内村以上に「無教会主義」を強調(塚本はその代表)

塚本虎二の「独立」

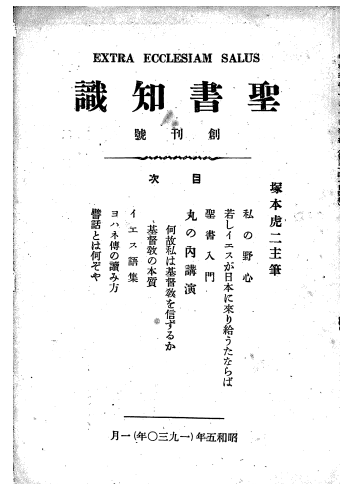
- 1929(昭和4)年10月、信徒の山田鐵道が病身の内村に対し、引退と、塚本への交替を提言(破門→謹慎)
- 内村は塚本に「独立」を命じる
- 塚本虎二と皆川とし子の結婚問題が起こる
(内村に司式を依頼、内村らの反対で結婚できなくなる)
- 1929年10月、塚本、東京・丸の内聖書講演会を開始
- 1930(昭和5)年1月、雑誌『聖書知識』を創刊
- 1930年3月、内村鑑三死去

4 無教会伝道の開拓者

「教会の外に救あり」

雑誌『聖書知識』

- 1930(昭和5)年1月創刊
～1963(昭和38)年休刊、1975年終刊
- 発行部数:二千数百部
- 誌名は内村鑑三が命名
- 標語「EXTRA ECCLESIAM SALUS」
「教会の外に救いあり」
 - 1932年10月に日本語併記
 - 戦時期に日本語のみに
- 主な連載:イエス伝研究
新約聖書口語訳
- 多くの小冊子・書籍の発行



標語「教会の外に救あり」

これはローマ・カトリック教会の黄金律「EXTRA ECCLESIAM NON SALUS」(教会の外に救いなし)から、NON(なし)を取除いた私の新造語である。「教会の外に救(あり)」の意である。教会の外にキリストの救はある。即ち、教会に往かずとも、教会員にならずとも、洗礼を受けず、聖餐に列^{つらな}らずとも、若しキリストを信ずる信仰だにあるならば、立派なクリスチャンであり、大手を振って天国に入る資格を有つてゐるとの意である。而してキリストの救に入る唯一にして充分なる条件は、ただ十字架を信ずる信仰のみであつて、教会も、洗礼も、聖餐も、クリスチャンたるの必要条件に非ずとするのが、ルーテルを以て始まる新教主義[プロテスタンチズム]の生命であり、また之を主張することが、本誌の最大使命であるから、これを以て本誌の標語としたのである。

(塚本虎二「教会の外に救あり——本誌の標語の説明」『聖書知識』第34号、1932年10月)

丸の内聖書研究会

- 1929年10月、東京「丸の内」で、聖書講演会を開始
- 1930年6-7月:名称、会場などが確定
名称:「東京聖書知識普及会」「聖書講演会」→「東京聖書研究会」
会場:「丸の内 生命保険館 階上」→「丸の内 東京海上ビル 新館八階」
- 出席者数:200~400名
- 塚本はモーニング姿で聖書講義
- 和洋の正装の聴衆=信徒たちが駅から会場へと参集
- 塚本の講義を熱心に筆記(1950年代の回想)
- 1920年代の内村鑑三による聖書講演会を踏襲・展開
- 東京(丸の内)の塚本虎二、大阪(中之島)の黒崎幸吉

『聖書知識』第7号(1930年7月)

**東京聖書研究会講演
会場變更!**

新会場 丸の内東京海上ビル
新館八階 商會堂
興業銀行前北口より入り
エレベーターにて上る
(市電)大手町 和倉門より各三分

日時 毎日曜午前十時より
十一時半頃迄

講師 塚本虎二

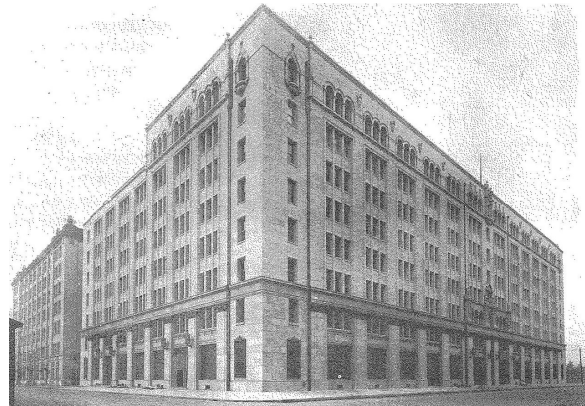
聴講料 一回 貳拾錢

○大清潔法施行の序に會場を變更しました。一には暑熱と雑沓を避けんが爲であります。多分日本最高の聖書講演會でありませう。大東京を瞰下してイエスの大福音を聴くのであります。大なる快心事であります。

○今度は海上保険であります。既に永遠の生命保険がつきし故に、これから人生の荒海に船出するのであります。言葉通りに無教會であつて、今や四十年の荒野放浪時代であります。

○七月十三日(第二日曜日)迄に一旦休會し、九月二十一日(第三日曜日)より再開します。

東京海上ビルディング新館（1930年竣工）



大正学会附属土木図書館デジタルアーカイブ内『土木建築工事画報 第6巻第4号』工事画報社、昭和5年（1930年）4月。
スラッシュサイン、<https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=121844143>

丸の内聖書研究会について（四家ケイ）

塚本先生の会は毎日曜午前十時から始る。私が始めて会に出席させていた頃、会員の方から『大抵の方は二十分位前に来ておます。貴女もそのつもりで……』と聞かされた時、ハッとしました。そして本当に真面目な会ならばさうでなければならぬと合点し、感心した。この時のこの言葉は生涯忘れられぬと思ふ。今でも私は二十分前を心がけてゐる。

会場はきれいに掃き清められて、机や椅子がきちんと並べられてある。後でわかったことであるが、塚本先生もお解りにならぬのに誰かがちゃんと早く来て準備されるさうである。お花がきれいに、生き生きとさされる。その花瓶の位置、花の向きにも細心の注意が拂はれてゐるのには全く驚いてしまった。

十時になると、一分の狂ひもなく司会者が壇に立つ。その態度は厳粛であり、精一杯の気迫が感じられる。そして讃美歌と開会の祈りにより、一週間此の世の戦で泥まみれになった会衆は福音を聞くに相応しいものとなり、会場は神の言を語られるに相応しいものとなる。

（四家ケイ「いわき聖書研究会の生ひ立ち（一）」『磐城無教会』第2号、1950年7月）

丸の内聖書研究会について（四家ケイ）

先生は、始めに柔らかいお話で時には笑はせたりなさり、次の固い食物を食べる用意をして下さるやうである。聖書のお講義になると研究のエキスを惜しみなく教へて下さり、丁度大学のお講義のやうである。研究としては新しいものを、しかも信仰は最も古い純粋なものを、人の顔を見ずに、神様からの言葉を割引なしに語られる。[……] 宣伝もなさらず、大声もお出しにならず、しみじみとお話が聴く者のほらわたに浸み入る様である。

最後の十分間でお話をまとめられる。この時は語る先生も、聞く私達も熱してゐる。「これがキリスト教の絶頂です。これがわからねば、どんなに聖書知識があつてもクリスチャンではない。わかった人は今始めて聖書の話聞いた人でも立派なクリスチャンです」と、よく仰言られる。このお話の間は本当に讃美歌三〇一（旧）がよく私の気持を表はしてくれてゐる。本当に現世が天国であり、われもなく世もなく、唯主のみのみませり。といふ感じてゐる。皆閉会になると明るい。生き生きとして力に満ちて、帰ってゆく。

（四家ケイ「いわき聖書研究会の生ひ立ち（一）」『磐城無教会』第2号、1950年7月）

5 新約聖書翻訳

【開拓地①】

教養読者層のバイブル

塚本虎二訳『新約聖書 福音書』岩波文庫、1963年

イエスによる「山上の説教（山上の垂訓）」

ああ幸いだ、神に寄りがるゝ貧しい人たち、
天の国はその人たちのものとなるのだから。
ああ幸いだ、ゝ悲しんでいる人たち、
かの日にゝ慰めていただくゝのはその人たちだから。
ああ幸いだ、ゝ踏みつけられてじっと我慢している人たち、
ゝ約束の地なる御国を相続するゝのはその人たちだから。
(マタイ福音書5:3-5)



ライフワークとしての新約聖書「口語敷衍訳」

時期区分	西暦	和暦	事項	備考
第Ⅰ期	1931	昭和6	新約聖書口語訳、雑誌『聖書知識』連載開始	戦前戦中の試訳（戦前の試訳）
	1944	昭和19	新約聖書口語訳、雑誌『聖書知識』連載完了	
第Ⅱ期	1953	昭和28	『口語 新約聖書 第一分冊』聖書知識社（マルコ・マタイ）	戦後の改訳
	1956	昭和31	『口語 新約聖書 第二分冊』聖書知識社（マタイ・ルカ）	
	1958	昭和33	『口語 新約聖書 第三分冊』聖書知識社（ルカ・ヨハネ・使徒のはたらき）	1960年 最初の発行、学生生活に入る
	1962	昭和37	『福音書』聖書知識社（マルコ・マタイ・ルカ・ヨハネの合本）	
	1963	昭和38	『新約聖書 福音書』岩波文庫	1963年 二度目の発行、療養に専念する
	1966	昭和41	『口語 新約聖書 第四分冊』聖書知識社（使徒・ローマ人・第一コリント人）	
	1975	昭和50	『口語 新約聖書 第五分冊』聖書知識社（ガラテヤ人へ……ヨハネの手紙）	第五分冊の改訳は生前に完成
	1976	昭和51	『口語 新約聖書 第六分冊』聖書知識社（コリント人へ……ヨハネの黙示）	
	1977	昭和52	『新約聖書 使徒のはたらき』岩波文庫	第六分冊は、戦前の試訳
第Ⅲ期	2011	平成23	『塚本虎二訳 新約聖書』新教出版社（2012 第2版）	そのほか、三冊の分冊（補助書の整理）
	2014	平成26	『新約聖書 試訳』聖書知識社	戦後の改訳+戦前の試訳+補助書の整理
	2016	平成28	『口語 新約聖書』聖書知識社	戦前の試訳 戦後の改訳+戦前の試訳（分冊の合本）

表3 塚本虎二訳聖書年表（赤江 2023の表をも、菊池和子氏の助言を得て修正した）

口語訳の先駆

西暦	和暦	日本語聖書	英語聖書
		文語訳（明治元訳）の時代（1880-1900年代）	欽定訳の時代
1879	明治12	聖書翻訳委員会 新約聖書 訳了	1611『ジェームズ王聖書』KJV
1880	明治13	聖書翻訳委員会『新約聖書』	英語 別巻『欽定訳聖書』AV
1887	明治20	聖書翻訳常置委員会 旧約聖書 訳了	1881-85『改訂訳聖書』RV
1888	明治21	聖書翻訳常置委員会『旧約聖書』	英語 KJの改訂版
		文語訳（大正改訳）の時代（1910年代）	1901『アメリカ標準訳聖書』ASV
1905	明治38	聖書社書店 改訳事業（植村正久、内村龍三、小崎弘道、船井重）一中止	米国 KJの改訂版
1917	大正6	改訳委員会『改訳 新約聖書』（大正改訳）	
		文語訳聖書 1887年の明治元訳（旧約）→1917年の大正改訳（新約）	
1921	大正10	大正改訳にもとづく英字新約聖書（金九章）刊行（配本留）	
		傳人訳の登場（1920-40年代）	
1928	昭和3	永井寛治訳『新約聖書』…そのほか、さまざまな個人訳が登場	
1931	昭和6	塚本虎二 新約聖書試訳（口語訳）『聖書知識』連載開始（-1944訳了）	
		口語訳の時代（1950-70年代）	RSVの時代
1950	昭和25	日本聖書協会 口語訳への改訳を決定	1946-52『改訂標準訳聖書』RSV
1952	昭和27	渡瀬圭一郎・渡瀬富雄訳『口語訳 新約聖書』キリスト新聞社	米国 ASVの改訂版
1953	昭和28	バルバロ訳『口語訳 新約聖書』（カトリック、サレジオ会士の個人訳）	米国キリスト教会協議会 認可
1953	昭和28	塚本虎二訳『口語 新約聖書 第一分冊』聖書知識社（-1976第六分冊）	
1954	昭和29	日本聖書協会『口語 新約聖書』	
1955	昭和30	日本聖書協会『旧約聖書 改訳』（口語訳）	
1956	昭和31	関根正雄訳『旧約聖書 創世紀』岩波文庫	
1958	昭和33	フランススコピ訳『創世紀』（カトリック公認訳）（-2002聖書全巻訳了）	1961『新英語聖書』NEB
1962	昭和37	塚本虎二訳『新約聖書 福音書』聖書知識社	英語 口語的で平易な訳
1963	昭和38	塚本虎二訳『新約聖書 福音書』岩波文庫（1991ワイド版）	1966-76『Good News Bible』TEV
1965	昭和40	新改訳聖書刊行会『新約聖書 新改訳』	米国 口語版自由聖書
1970	昭和45	新改訳刊行会『旧約聖書 新改訳』	1973-78『新国際版聖書』NIV
1977	昭和52	塚本虎二訳『新約聖書 使徒のはたらき』岩波文庫	米国 やや文語的な訳
		共同訳の成立（1978年）	
1978	昭和53	日本聖書協会『新約聖書 共同訳』	
1983	昭和58	前田護和訳『新約聖書』中央公論社	
1987	昭和62	日本聖書協会『聖書 新共同訳』	
1993	平成5	関根正雄訳『旧約聖書』教文館（-1995/1997）	米国 RSVの改訂版

（赤江 2023）

表2 聖書翻訳史 関連略年表

日本の聖書学と塚本虎二

名前	生没年	分野	主な経歴	所属	出身教会
塚本虎二	1885-1973	新約聖書学	官僚、内村の助手	専門の独立伝道者（1930創刊）	内村
黒崎幸吉	1886-1970	聖書学	住友、助手、留学	専門の独立伝道者（1926創刊）	内村
関根正雄	1912-2000	旧約聖書学	ドイツ留学	東京教育大学文学部（1954着任）	内村→塚本
前田護郎	1915-1980	新約聖書学	ドイツ留学	東京大学教養学部（1950着任）	塚本
中沢治樹	1915-1997	旧約聖書学	アメリカ留学	立教大学文学部（1954着任）	矢内原・塚本

表1 無教会の聖書学者（赤江 2023）

- ・戦後日本の大学（アカデミズム）における聖書学の制度化
- ・そのひとつの源泉としての塚本虎二（ギリシヤ語聖書研究会）
- ・聖書学の専門化・高度化のなかで、独学の先駆者が見えにくくなる
- ・だが、岩波文庫というかたちで、現在も広く読まれている

「教会のなき人のための聖書」

教会をもたず、自分一人で聖書を読まねばならぬ無教会の人々にとって、読んでわかる聖書をもつことは絶対の必要である。実際現行訳の聖書を、これを読んで一人で信仰の道を歩きなさいと言うのは、残酷以外の何物でもない。私が改訳を志したのは、教会にゆかぬこれらの人達に、自分で読んでわかる聖書を提供したいという、ただ一つの目的であつた。

（塚本虎二「口語訳の成るまで」『聖書知識』第285号、1954年1月、9頁）

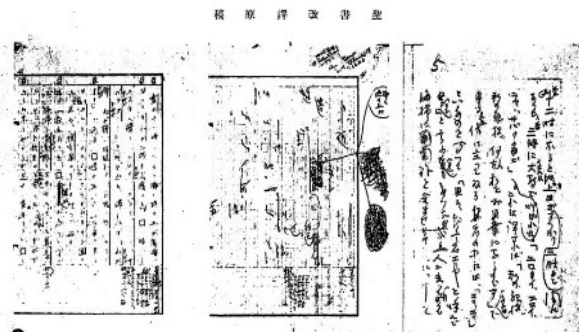
私はいま療養所の人たちからイの一番に電報をもらつて、神に対し言い難い感謝をおぼえるのである。教会をもつ人、自由に原文が読め、或は外国語の翻訳や註解の読める人たちには、私のこの訳はあまりに稚拙ともみえ、粗末に感じられるであろう。また敷衍や説明は邪魔とも思はれよう。しかし教会も牧師もなく、ただ一人でナザレの大工の子イエス・キリストの福音によつて救われようとする、たつた一人の人の友となり得るならば、私の念願は達する。

（塚本虎二「三報の電通」『聖書知識』第285号、1954年1月）

6 女性信徒との協働

【開拓地②】

皆川とし子との共同作業



左は出来上り原稿
中央は皆川が整理し意見を付したものを塚本が取捨訂正したもの
右は塚本の訳しつ放しの原稿

「口絵 聖書改訳原稿」
『聖書知識』第160号、
1943年4月

- マルコ伝十五章三十三節より三十六節まで
- 右は塚本の訳しつ放しの原稿
- 中央は皆川が整理し意見を付したものを塚本が取捨訂正したもの
- 左は出来上り原稿

女性信徒が活躍する〈信仰＝研究〉の共同体

塚本虎二による聖書・語学教育

- 1920年代半ば以降、聖書ギリシャ語の勉強会・講習会
- 1960年までに400名が聖書ギリシャ語を学ぶ
- その初期から、女性信徒たちも参加
- 1930年代以降、塚本虎二の協働者となっていく

塚本虎二の女性協働者たち

- 戦前の助手：皆川とし子
- 1930年代、数名の女性が福音書異同一覧作成に従事
- 戦後の助手：岩永恭
- 戦後の独立伝道者：白井きく

塚本集会＝女性信徒が活躍する〈信仰＝研究〉の共同体

塚本虎二と女性たちへの非難

斎藤宗次郎『復刻 聴講五年——晩年の内村鑑三に接して』教文館、2018年

- ・内村による非難（終末期の例外的な発言）

塚本君に悔改めて貰いたいということなのだ。四十を越えた塚本君が二十二三の娘さんと結婚したいから承諾して式を挙げて呉れとの申込みだ。[……]二時間も待って居って大久保で待ち合して一緒に帰るという始末だ。若し欠点でも探す気で見たならば、何んな事があるかも知れない。こんな女と関係して居る事が悪いと思わぬのは、何という誘われたる心であろう。（斎藤2018:671-672）

親しく其実状を見ると案の如く若き婦人の跋扈、信仰も誠実も無き若き女共の狂瀾怒涛は一大勢力の如くなって居るのであった。これは全く塚本なる人物の存在に伴う現象であることが疑われぬ事実であった。（斎藤2018:672）

- ・塚本批判が、塚本を支持する女性信徒たちへの非難につながる
- ・このような、終末期の内村による例外的な発言が、藤田若雄編『内村鑑三を継承した人々（上・下）』（1977）における塚本虎二評価に影響している

塚本と女性たちをめぐる内村周辺の語り

斎藤宗次郎『復刻 聴講五年——晩年の内村鑑三に接して』教文館、2018年

- ・斎藤宗次郎、女性信徒との会話（噂話）の記録

彼女（皆川とし子）は本郷の人 田島牧師より受洗せし牛込教会の信者。目下神経衰弱にて引込み居る由。両親心配し居るとのこと。／曾[かつ]て大阪駅にて塚本先生は内村先生と別れ若き女四五名を連れ遊び廻って汽車時間の迫る時自動車にて帰り来たりし由。／九州えは岩永なる学生と共に行く。／市中何処へでも二人で歩く電車のある所でも必ず歩くという始末。（斎藤2018:681）

- ・男性信徒の語り

皆川、岩永、清水は三羽鳥 それに井上を加えて四天王か。／大久保駅 新宿等で塚本先生の柏木から帰るのを擁するという有様は実に妙な熱心なものであった。田村君と僕とは何時も気持悪くあった。ああした女の執拗なる心は我等には了解が出来ない。（斎藤2018:683）

⇒塚本虎二の「女性問題」？

塚本虎二と女性信徒たち

塚本虎二と皆川とし子の出会い

- ・1926年（大正15）夏、日本YWCAの全国夏期修養会（静岡県御殿場）
- ・皆川の煩悶（救いの悩み）に触発される

神の国に入る唯一絶対の条件はただ受けることである。これ以外に何等の条件はない。資格の制限は無い。美はしき道徳も、熱心なる祈禱も、聖書知識も必要ではない。また人生の苦痛の経験も必要ではない。勿論罪の苦がき経験を必要としない。必要なるは信受の心である。

（塚本虎二「神の国は受くべきものなり」『聖書之研究』第314号、1926年9月、40頁）

- ・女性求道者たちの信仰に学ぶ塚本虎二

この年[1926年]私は、彼女[皆川]を魁として多くの純なる魂が神へと転回する偉大なるまた神聖なる「観物」を見て、たとひ全宇宙を疑ひても「信仰のみ」の信仰を疑ひ得なくなった。

（塚本虎二「皆川とし子を葬る辞」『聖書知識』第160号、1943年4月、17頁）

⇒塚本虎二の姿勢が、塚本集会における女性の活躍を可能に

7 皇室教育 【開拓地③】

塚本虎二による天皇進講(1948)

十一月二十九日、恐れ多くも天皇陛下に内村鑑三先生のことどもを御進講申上げることになった。これは日本の基督教界にとり記念すべき出来事であらねばならぬ。今でこそ内村先生が眞の愛国者であり、また眞の基督教を我が国に植ゑつけた功労者であることが大分世人に了解されて来たが、かの不敬事件以来、先生は不敬漢と呼ばれ、国賊と罵られて来たのであつて、日本クリスチヤンの誰かが皇室に対し先生の為に免(えん)をさすがねばならなかつたのである。然るに今やその時が来た。私はその責任の重大を感じながら、このことを邦家(ほうか)のために慶賀せざるを得ない。

先生の皇室尊崇は私達の驚きであつた。(……)今度御自身のことが進講されると知り、迷惑がりながらも果していかなる感懷をもたれるであらうか。

殊に世界の文明国に伍せんとする日本の象徴たる我等の陛下に、より深き聖書の御理解を希ふ心は、私達クリスチヤンの祈である。東京裁判の判決が下つた年、その全生涯を聖書の研究と日本人への聖書知識の普及とにささげた内村先生の事業と信仰が天聰に達するに至つたことに、私達は神の大なる摂理をみる者である。

(塚本虎二「内村先生の皇室尊崇」『聖書知識』第224号、1948年12月、表紙2頁〔表紙裏〕)

塚本虎二による天皇進講(1948)

塚本虎二の公開日記

十一月二十九日(月)晴 全生涯中忘るべからざる光栄の日であつた。この日九時過ぎ参内、十時十五分から十一時まで畏くも天皇、皇后両陛下に、内村鑑三先生の生涯と事業につき御進講申上げた。両陛下には終始熱心に私の下手な話にお耳を傾けられ、種々御下問があつた。茶葉を戴いて退下した。田島[道治]宮内府長官、三谷[隆信]侍従長、鈴木侍従次官、保科女官長、侍従、女官の陪席があつた。不敬漢、国賊、売国奴と罵られ、一時天下に枕する所なかつた先生のことを両陛下にお話し申上げる時が来ようと、誰が予想したであらうか。まことに夢である。否、夢ではない。時の力である。否、時ではない、真理の勝利であり、神の摂理である[。]

(塚本虎二「雑感雑録」『聖書知識』第225号、1949年1月、20頁)

無教会派の「皇室教育」 南原繁・矢内原忠雄・塚本虎二

- ・1945年末～1946年6月、南原繁が高松宮宣仁〔のぶひと〕(天皇裕仁の弟)に政治哲学史を講義(日曜午前中に17回)。南原は天皇退位論者、天皇退位後に摂政となる高松宮への「帝王学」講義
- ・1946年4月、矢内原忠雄に、皇太子明仁への進講の打診
皇太子に「信仰の話」をするようにとの内報(実現せず)
- ・1947年前後、塚本虎二による、李王(李垠〔リ きん、イ・ウン〕)に個人講義
- ・1948年、南原繁に宮内府長官の打診→固辞
田島道治が着任(柏会出身者)
- ・1948年、塚本虎二、天皇裕仁に進講、内村鑑三について
- ・1949年、矢内原忠雄、天皇裕仁に進講、新渡戸稲造について
- ・1950年、南原繁による、天皇裕仁に進講、米国旅行談

無教会キリスト教と宮内官僚・職員

無教会シンパ:

田島道治(初代宮内府長官、「柏会」出身者、新渡戸門下)

塚本虎二集会:

三谷隆信(侍従長)

関屋貞三郎(元宮内次官、元枢密顧問官)

矢内原忠雄集会:

村井長正(東宮傳育官、東宮侍従→登戸学寮寮長、無教会伝道者)

→無教会キリスト教と「天皇＝皇室」の仲介者の役割を果たす

敗戦後における皇室と無教会の接近、相互の関心

- 皇室のキリスト教への関心、無教会キリスト者への依頼
- 天皇が聖書を学ぶことによる「日本精神」変革への期待

無教会と天皇制の関係を問いなおす

無教会キリスト教と「近代天皇制」をめぐる両義性

- 天皇が人間であることは前提(→天皇の神格化への批判)
「天皇制」批判のエートスとしての無教会主義
- 国民の中心としての天皇=皇室は重視(無教会派の「日本的キリスト教」)
「天皇制」国家を支えるエートスとしての無教会主義

無教会第二世代の「皇室教育」と、その終焉

- ・ 天皇の人間宣言(1946)以後、「象徴天皇制」への期待
- ・ 1948年頃がピーク(矢内原、天皇が聖書を学ぶことへの期待)
- ・ 1949年頃には、終わりに向かう(矢内原の失望)
 - ・ 1949年の矢内原の進講、天皇は興味なき様子(田島道治『昭和天皇拝謁記』)
 - ・ 1950年の南原の進講、天皇の南原嫌い(皇太子の進学、南原総長の東大を避ける)
- ・ 占領期の終わり(=天皇制の存続)がみえてくると、両者は離れていく

8 20世紀宗教文化史の ミッシング・リンク



内村鑑三記念講演会 大阪中央電気倶楽部にて 1933年4月3日

(前列左から) 金澤常雄、塚本虎二、畔上賢造、黒崎幸吉
(後列中央) 矢内原忠雄、[その右] 三谷隆正

(無教会史研究会編 1993)

20世紀宗教文化史の「失われた環」

塚本虎二とは

- 1930年代から50年代にかけて、無教会「第二世代」のネットワークにおいて、もっとも主要な結節点である
- 無教会史の文脈にとどまらず、日本キリスト教史、さらに近代宗教文化史において検討されるべき、20世紀日本を代表する独立伝道者である

塚本虎二研究の射程

- 塚本虎二の伝記的研究
- 無教会「第二世代」の新たな像(イメージ)の提示

⇒ 20世紀日本の宗教文化史をえがきだす